

「膵管像からみた膵疾患の臨床と病理」

福岡大学教授・第1外科 池田靖洋 著
新潟大学教授・第1病理 渡辺英伸 執筆協力
新潟大学医学部第1病理 古田 耕

素晴らしい本が出版された。池田靖洋教授著の「膵管像からみた膵疾患の臨床と病理」である。まず、本を開くとみごとな膵管像に感銘を受ける。著者が考案されたバルーンカテーテルによる膵管造影は、小さな膵管分枝の異常まで忠実に写し出している。よく造影された膵管像が丹念に読影されており、小さな分枝の閉塞だけで膵癌と診断された症例がある。膵管の十分な充満像がなければ、精密診断はできないことを教えてくれる。ERCPはX線検査であり、膵胆管開口部にカニューレを挿管する内視鏡的な手技は検査のごく一部で、主眼はきれいなX線像を撮ることであると著者が常に主張されているが、まったく同感である。

経過検査を行った症例が多いが、ERCPは楽な検査ではないので患者に信頼され検査が上手でないと、繰り返し検査を行うことに患者の同意は得られない。著者は外科医であるが、膵管異常例の診断に迷った経緯、手術した理由、手術に対する反省などがコメント欄に簡明に記載されており、真摯な人柄がよくわかる。診断困難例の手術は分節切除に

よる迅速組織診断を行ってから術式を決定し、侵襲を少なくする努力がなされている。

本書では図の掲載に細かい配慮がされている。症例ごとに経過検査を含むERCP像が最初にあり、次の頁にUS、CT、血管造影などの写真、その次の頁に病理所見が記載されているので読みやすい。若いドクターにERCPの写真だけ見せて、診断をつけさせる教育にも使用できる。

切除例の病理組織学的検索も1例1例詳細に行われている。切除標本の膵管造影に切り出し線を入れて、切り出しの剖面写真、マクロ、ミクロの順で載っているのによくわかる。執筆協力者の渡辺英伸教授、古田耕先生が病理所見に明快な解説を加えている。術後の膵管造影も多数の症例に行われており、詳細な病理学的検索と合わせて著者のERCPによる膵疾患診断の執念がうかがえる。膵管の狭窄像・閉塞像の鑑別診断が症例を呈示してわかりやすくまとめられているのは、実地の診療に役立つ。

著者はERCPの開発に携わった

ベテランである。論文“内視鏡的乳頭括約筋切開術の長期成績”(胃と腸 20: 1169-1180, 1985)で、胃と腸賞を受賞された。この論文では411例のEST施行例全例を経過観察して、予後が詳細に調査されている。普通ではできない仕事である。本書でも1例1例を大切に著者の姿勢がよくわかる。

現在は膵疾患にUS、CT、MRI、ERCP、血管造影など多岐にわたる検査を行って診断する傾向が強い。総合画像診断は各検査法で異なった所見が得られ診断に役立つが、どの検査もつきつめて行わないために明確な所見が得られず、不必要的検査まで施行する傾向がある。いろいろな検査をいい加減に沢山行っても、結局診断ができないこともある。特にERCPでよく造影された膵管像のスライドを学会、研究会でみることは少ない。不十分な検査では検査法のまことの価値はわからない。本書は1つの検査に打ち込めば、どこまで診断できるかを明確に示している。また、臨床医にとってもっとも大切なことは症例を1例1例大切にすることであると教えてくれる。膵疾患の診断と治療について必読の書である。

(順天堂大学教授・消化器内科)
有山 襄

● A4変型 368頁 図41 写真
348 原色図261 1991年 定価
29,870円(税込) 7400円

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)